

発言要旨 松本市農業の課題解決プラットフォーム「活かす農まつもと」
令和6年度 コア会議

※本文中に頻出する用語について

「検討部会①」…新しい農業の発信地・松本の売込み

「検討部会②」…個性を生かした中山間地の再生・活用

【柳澤氏】

前回の会議から1年が経過している。2つの検討部会のこれまでの活動経過を共有して今後の方向性を決めていきたい。まず、各検討部会から報告を受けた後で、質疑応答など議論していきたい。

【横山氏】

検討部会①では、地元農業団体（松本農未来プロジェクト）、観光部門（観光プロモーション課、観光コンベンション協会）、農政部門で令和6年中に4回、また令和7年1月には松本農未来プロジェクトで新年会も兼ねて1回、合計5回に及んで農業観光ツアーの商品化に向けて議論を重ねてきた。

また、実際にやってみないことには商品化に向けて何が課題か見えてこないため、試験的農業体験ツアーを実施して課題の整理も行った。お客さん役として、行政関係者を15名ほど招いた。

一番ありがたいのは、観光コンベンション協会が前向きに検討部会に参加してくれて、今井地区での農業体験ツアーを令和7年度から商品化して実際に販売することが決定したこと。今後さらにツアー内容を検討していき、また第2回目の試験的ツアー（水稻や摘果作業）も企画している。

今後の方向性として、元気づくり支援金の活用も含め、3年間でハード面の整備など農業体験ツアーの基礎を固め、その後は収益の観点からも自走式でやっていけるようにしたい。

【梶原氏】

検討部会②では、部会としての会議は全3回行った。学校給食への食材提供を通じた四賀地区の農業生産拡大（生産者の所得確保を含む）、地産地消の拡大の観点から検討を進めていった。

四賀給食センターの規模（1日230食）からすると、農業法人など大規模農家ではなく、初期段階では地区の個人の農業者達から持ち寄りで供給していくことが現実的と判明。そうしたなかで、「いつ・どれだけ・どのように」地区の農業者が農作物を給食に提供可能か、また目標値をどうするかも議論の中で固めていった。

提供方法については地元農業者で給食提供のための「生産者組合」を結成し、学校給食課の栄養士との連絡窓口を1本化する方向で集約。目標は、学校給食で

の使用頻度が高い主要15品目の県内産使用率を現状の42%程度から毎年2%ずつ上げていき、令和10年に50%を目指す方向で集約。

農業者の所得価格の観点から、価格についても有機農法の多い地域で高めとなっても安定していれば、昨今の気候変動で市場価格が乱高下して不安定になるよりも予算管理の点で良いという学校給食課からも話があった。

今後は、生産者組合と食材発注担当の栄養士とで密に連携して、具体的に話を進めていく段階となった。

【柳澤氏】

それでは質疑応答など議論に進んでいきたい。

【丸山課長】

検討部会①では、観光コンベンション協会の存在が大きい。今積極的に動いてくれている担当者の異動もあり得ることから、どんどん話を進めていって欲しい。

検討部会②について、現状の段階では中山間地の農地活用の範囲を広げることには直接つながらないが、現状の農地を維持していく面で有効的な取り組み。今後の方向性として、給食へ共有する分の生産量が上回った場合（農作物が余ったとき）にどうするか、活用については何か話は出てきているか？

【梶原氏】

生産量が上回った場合について、大規模センター（東部給食センター8,000食規模）から貯蔵野菜であれば引き取り可能である旨のお話はいただいている。本来ならば、学校給食の食材は提供日当日の納品でなければならないが、その点を柔軟に前日納品でご対応いただける。

今後順調に生産者が増えていき、生産量（供給量）が増えていった場合でも、出口は増やしていける見込み。

【三宅氏】

検討部会①について、商品化まで決定しており進捗具合に驚いている。その商品内容について質問ですが、ターゲット層という観点からターゲットごとに体験ツアー内容は分けているのか？

【横山氏】

分けていない。まだターゲットを絞る段階としては早いとも考えている。実際に一度も販売してお客様を受け入れていないので、そもそもどんなお客様が来るのかも見えていない。まずは多くの人にツアー商品を購入してもらうところから。観光コンベンション協会の話によれば、実際に応募があるのは比較的金と時間に余裕のある高齢者が多いのではという見込み。本来の目的としては「農業者を

増やすこと」なので、販売開始2年目以降に若い人に興味をもっていただけるようなスマート農業やDXなどがテーマの観光商品を模索していく。

【三宅氏】

播種するだけでなく収穫までできるとより良い体験となるのではないか。

【横山氏】

収穫適期に必ず来てもらえるとも限らないこと、収穫期は受入側が忙しいことも踏まえて、収穫されたものを送るということを検討している。

【三宅氏】

収穫等の体験だけでなく、農業をすることで儲かるのかという話を座学で聞かせる内容があってもいいと思う。

【横山氏】

実際にやってみて、受入側がするアドバイスや苦労話等の説明が予想以上に上手で、なんとかなるという感触を得た。

小中学生など若い人たち向けには儲かるよという説明は興味を引けると思うが、純粋に農業体験に来た人たちにするのはどうかという気もするので、客層ごとに接客テーマを作るのが必要かもしれないと先生の話聞いて思った。

【三宅氏】

学校給食で地産地消・有機栽培が出てくるのはいいと思う。これからになると思うが、なぜそれらが必要なのかを小学生たちに教育面からアプローチする場があってもいいと思った。

【梶原氏】

市で「環境にやさしい給食の日」という取組みがあり、講義をしたことで残飯率が減ったという実績もあるため、教育面も絡めるということは大事なことだと思っている。

【柳澤氏】

子供達に自分達が食べているストーリー性をわかりやすく説明していければ理解の仕方も変わってくると思う。

【長谷川部長】

生産者の窓口を一本化できたのは良かったと思う。生産者組合に参加している農家は何軒くらいか。

【梶原氏】

今のところ 3 軒で、うち 1 人が直売所の副会長なので何かあればそこからも野菜を提供してもらえるルートを持っている。

【長谷川部長】

価格については年間や期間を通してあらかじめ設定して取引するという形になるのか。

【梶原氏】

現状は約 1 カ月前に値段が決定し、発注可否の連絡を取り合っている状態。また、価格は 3 人別々の状態だが、将来的には組合で一本化したい。将来的にはもっと長い期間で価格を一定化する方向で給食センター側は望んでいると思う。

【長谷川部長】

給食センター側も年間費用が読めるとやりやすいし、若干高めでもやれると思うし、これから調整していけばいい。

生産が増えて余った場合でも他の給食センターで取ってもらえるという話もあったので、組合の拡大は期待できる。

【梶原氏】

組合が出来たことで供給側が増えても窓口が一本のままなのは良かったと思う。

【柳澤氏】

それぞれの部会が、課題を抱えながらも動き出している。小さな一歩が進むことによって大きな動きとなっていく。

検討部会①では体験を通して新規就農者が集まってくるような方向に持っていけるようこれからの期待したい。

議題(2)の今後の方向性について、コア会議の開催頻度について意見を伺いたい。

農業は一通りやるのに 1 年かかるので頻繁には難しいと思うがどうか。

【長谷川部長】

必ずしも定期的を開催する必要はないと思うが、既存の検討部会の 1 年間の取組みのまとめや、新たなテーマについての相談をする機会等必要に応じて随時開催すればよいと考える。

【三宅氏】

それでいい。

【梶原氏】

必要に応じてでよい。

【横山氏】

先生から意見・情報をもらえる機会がコア会議しかないので、なるべく多い方がよい。今後取組みが進むにしたがってぶつかる壁が増えると思うので、その際に知恵を借りられる機会があるといい。

【丸山課長】

希望に応じての随時開催と、取組状況に関して報告事項があれば途中報告もさせていただこうと思っている。

【柳澤氏】

検討部会①・②については最低年 1 回、新たな検討課題は時機を見ながらになると思うが年に 1~2 回になると思う。

議題(3)の新たな検討課題について、事務局から。

【事務局】

これまでのコア会議では 3 つ程度の検討部会で進めていくのが良いという議論が行われてきた経過がある。3 つ目の検討部会の設置について、関係機関からの意見聴取を行いながら検討していく方向で提案したい。

【横山氏】

教育という観点から、小中学生に農業クラブを作ってはどうか。年間を通して作付から販売までを行って面白さを体験してもらい、職業の選択肢として農業が入ってくるようにしたい。先の長い話になるし、教育委員会等の学校機関も巻き込んでの話になる。

【柳澤氏】

農業委員会で横浜へ研修に行った際、「根っこ塾」という小 4~中 3 を対象として播種から収穫、加工まで経験する場が民間であった。経験を通じて農業に親しみを感じ理解を含める非常良い取組みであったと思う。横山氏の話はそういったことを行政も入って公的な形で出来ないかということだと思う。

【三宅氏】

教育の界隈で主体性を育むことを進めている中で、農業なら来年こうしよう

といった工夫を取り込めて非常に良い取組みだと思う。

【横山氏】

今井小学校では小 4 くらいからりんごの消毒や摘花などをやる。ひと月からふた月に 1 回程度の頻度で受け入れている。クラブ活動だと毎週あるのでより本格的な農業に近づくことができる。昔は 8 割くらいだった農家の子供も今は 1 割程度で父兄からりんご園を探すのも大変と聞く。だからこそ農業に興味を持つ子供もいると思うので、そこを育てたい。

【柳澤氏】

本郷小学校でも長ねぎの栽培をやっている。稲やぶどうの摘果・収穫くらいだが、子供に経験をさせたいという大人が主体。根っこ塾は子供が主体となってやっているの、関わり方が進んでいると思う。これからの農業を考えたときに子供が主体となった農業の取組みが必要だと思う。

【梶原氏】

土に触れることで情操教育にもなると思う。二度とやりたくないとはならないように。

【横山氏】

きれいな部分だけでなく大変な部分も経験することが大事だと思う。

教員から話を聞くと、文科省からも積極的に実施するよう通達は来ているが、どうやっていいかわからない部分もあり、提案があればぜひやりたいという教員もいる。そういった部分を教育委員会を中心に改革してもらえれば、我々は現場で支えるという形を取りたいのでご検討いただければ。

【長谷川部長】

こちら(農業)側の思いと学校現場の状況とで意見交換を行い、すり合わせる機会は設けてみればと思う。

【柳澤氏】

事務局からもあったが、JAや農業農村支援センターらと話をすることによって次の課題を掘り起こしていくことが必要だと思う。

最後の議題その他について、事務局の方から説明を。

【事務局】

提案事項ということで、1 年間の成果を市長に報告する機会を設けてはどうかと考えるがどうか。

【長谷川部長】

皆さんが苦勞して取組んできて形になりつつあるものもあり、現状について市長に知ってもらうことも大事だと思うとともに、新しい取組みも始まるというPRにもなるので、皆さんがよろしければやっていきたい。

【横山氏】

可能であれば残り 2 回の模擬試験の中で市長・副市長が参加していただけると、今井の農業が直接届いて面白いと思うので検討して頂きたい。

【柳澤氏】

進捗報告や今井の試験への市長・副市長の参加については事務局に一任します。

横山氏からは軌道に乗るまで 3 年くらい時間が必要との話があったが、検討部会として進めていく期間はどのくらいを考えているか。

【梶原氏】

先日の部会で実働部隊である生産者と給食センターとで絞り込まれたので、毎回新しい関係者を巻き込んで部会を立ち上げるのは荷が重いと思う。ここまで絞り込まれたら、検討部会②については必要に応じて農政課と情報交換をするというような状態になっていると思う。

【横山氏】

3 か年計画でもっとメンバーを増やしていきたい。より多くの考え方を参考にしていくことが大事。より若い農家を巻き込んで、松本農未来なので今井だけでなく他地区も農業観光として回れるような組織としていければと思う。

【長谷川部長】

検討部会は必ずしも期間を定めてやる必要はないと思っている。

様々な利害関係者に市が声掛けをしてスタートするが、方向性が定まるなどして絞り込まれてくれば、あとは関係者が中心となって運営の主体となるよう移行していければと思っている。

【梶原氏】

課題は今取組んでいる一つだけではないので、次の課題への取組みに行政や大学の先生方に引続きご協力をいただきたい。

シカが目撃数が四賀でも激増し、防護柵内にも侵入しているため、四賀の生産者はそちらも対策してほしいと思っているので、鳥獣害への対策の検討部会も立ち上げていただきたい。四賀だけでなく中山などの中山間地も含めてより良い課題解決にむけて立ち上げられたら。

【横山氏】

色々なテーマを持っている方がいると思うので、メンバー固定ではなくより多くの方に参加してもらうようにコア会議が発展していくべきだと思っている。

【柳澤氏】

今の検討部会は最初の小さな一歩なので、うまく進めていくことで広範囲に広げていけたらと思う。プラットフォームが農業上の課題が無くなるまで長期間の取組みになっていって、一つ一つ課題の解決につながっていくことが本来のあり方だと思う。

【梶原氏】

お配りいただいた資料のとおりヤギの放牧を始め、大きな除草効果を上げた。平地ではなく斜面を好み、つないでいなくても大丈夫だし、除草が厄介なイタドリやクズを好んで食べている。うまく活用できれば省力化になる。一方で冬場の餌は、干草だけでなく笹や松も食べることが分かり、中山間地にあるもので飼っていけるので、少しハードルは下がったと思うが生物相手なので予想外のこともある。獣害対策の一つの方向になるかもしれない。

【三宅氏】

プラットフォームというと、様々なステークホルダーの方々が参画して、その中からコア会議に発展していったというイメージがあるが、色々な課題を出していくという点においてはメンバーを広く募集して現場の意見を直接拾えるような体系にできたら、より充実した議論が可能だと思う。

【長谷川部長】

最初この仕組みを導入する際に、メンバーの公募をしてはどうかと意見を出したことを思い出した。本体のコア会議ではなく検討部会を立ち上げる時に、課題について興味関心のある、農業に直接関わらない企業の方や個人でやられている方にも入っていただいて、新しい発想で展開が広がるかなと考えていたことを思い出した。これから進める中で考えてみてほしいと思う。

【柳澤氏】

2つの検討部会をどんどん前に進めていってもらいたい。